

SOMETHING FOR

JOEY

ジョーイ



ジョーイ、君の手のぬくもりは決して忘れないよ。
 誰のために、その青春を賭けるのか、「ロッキー」に続いて贈る愛と涙の感動作

ジェフリー・ラナス / マクシム・ジエラルド・オルリン
 製作 脚本 エリー・マクニリー 監督 アン・トナ 音楽 エッド・シャイア
 (カラー作品) アメリカ映画 日本ヘラルド映画

この映画は、終つても
 しばらく明かりがつかまません

《文部省特選》



「ロッキー」をしのいで涙と感動が広がる愛と青春の秀作!

いま試写が行われるたびに、観た人々の感動と涙が異様なまでの熱気をはらんで広がっている映画がある。それがこのアメリカ映画「ジョーイ」である。あの「ロッキー」に続いて、またしてもアメリカ映画は、愛と青春をテーマに、圧倒的な感動をたたえた傑作を送り出したのだ。



ドラマチックに明かされた美しい青春の燃焼と兄弟愛!

'73年12月、プロ野球の三冠王など比べることも出来ない程の栄誉だという全米大学フットボール界の最高賞ハイズマン・トロフィーの受賞式がニューヨークからTV中継された。受賞者は、ペンシルバニア州立大学のジョン・キャバレッティ。彼のスピーチは、副大統領をはじめとする列席者に、自分の父母、兄弟、姉妹を感謝の意をこめて紹介することで終ろうとしていたが、11才の末弟ジョーイを紹介する瞬間に至って不意に激情にかられた彼は、ジョーイが不治の白血病と闘う身であり、その想像を絶した苦しみに比べれば、自分のフットボールにおける苦しみはなにほどのこともない、トロフィーは弟のものだと叫ぶ。

青春の栄誉をたたえる最高の舞台で、ドラマチックに明かされた若者のスポーツに賭ける情熱の動機が、最愛の肉親の生命に対する限りない激励であり、その運命の苛酷さに対する怒りの挑戦であったという事実、その事実が全米を感動させ、泣かせた。



愛の記録を
キャバレッティ一家に取材

脚本家のジェリー・マクニーリーも感動し、涙した一人だった。彼は、ジョン

とジョーイの兄弟愛を、そしてジョンに劣らずジョーイを励まし続けたキャバレッティ一家の家族愛の物語を映画にしようとした。一家と同居し、一家の愛の記録、感動的なエピソードを取材したマクニーリーは、ジョーイの死後——ジョーイは、1976年、4月8日に13才の若さでこの世を去った——製作者も兼ねてそれを発表した。

新鋭監督ルー・アントニオの見事な手腕

監督はTVの「警部マクロード」、「ロックフォード氏の事件メモ」などで注目された新鋭ルー・アントニオ。『従来の「白血病」を扱った映画は作りものが多く涙の押しつけがましさはがまんでできなかった。私は、事実だけがもつ感動をできるだけ客観的にとらえようとつとめた』と語るアントニオ監督だが、少年の痛々しい苦しみを、深い愛情とどうしてやることも出来ない無力感の間で耐えながら見守る家族一人一人の描写、そして弟にとって自分しかヒーローになってやれないことを自覚したジョンの情熱の高まりから、すべての人々を泣かせるクライマックスの受賞シーンへとドラマを盛りあげていく手腕は、新人とは思えない見事さである。



感動を盛り上げる天才子役ジェフリー・ライナス少年

あどけないジョーイ少年には、日本未公開だが「パパは嘘つき」で'76年度ゴールデングローブ賞にノミネートされた天才子供ジェフリー・ライナスが抜てきされ名演技を見せる。兄のジョン役には、舞台の「じゃじゃ馬ならし」でロサンゼルス演劇批評家賞の最優秀演技賞を受けている大型新人マーク・シンガーが起用されて映画デビュー。母親役のジェラルディン・ベイジ(「渴いた太陽」、「夏と煙」)、父親役のジェラルド・S・オルーリン(「バラキ」、「合衆国最後の日」)は共に個性派の名優。音楽は、「さらば愛しき女よ」、「大統領の陰謀」などで、最近続々とヒットを放っているデビッド・シャイアが担当、心にしみとおる佳曲を書いた。

上映時間1時間38分

◎ハイズマン・トロフィーの由来

ハイズマン・トロフィーは、1892年から1928年までフットボール・コーチとして活躍したジョン・W・ハイズマンを記念して1935年に設立された賞で、毎年ニューヨーク・シティのアスレティック・クラブで全米大学フットボール界の最優秀選手に贈られるトロフィーである。今年で42回を数えるこの受賞式には副大統領ほか、各界の名士が出席し、スポーツ界の盛大な行事となっている。



Something for Joey
ジョーイ

カラー作品 ●アメリカ映画
監督ルー・アントニオ
音楽デビッド・シャイア
《文部省特選》
日本ヘラルド映画 

